

国立国語研究所学術情報リポジトリ

＜講演＞2050年の日本語はどうなる？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西原, 鈴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000919

二〇五〇年の日本語はどうなる？

国際交流基金日本語国際センター所長

西原鈴子

私は、『二〇五〇年の日本語はどうなる？』というタイトルで、皆様方と一緒に考えてみたいと思います。

二一世紀半ばを予測して、四つの観点から考えたいと思います(図1)。初めに、二〇五〇年の日本社会はどのように予測されているか、次に、そのことは日本語社会にどんな影響を与えるのか、三番目は、そのとき、日本語そのものはどのように変わっていくかを推測してみます。それを見据えて、最後に、今から私たちはどうしたらよいのか、ということに心掛けたらよいのか考えてみたいと思います。

日本の人口構成と未来像

二〇五〇年の日本の人口構成の未来像を図2にお示しします。その図の左側は、今から八年前の平成一七(二〇〇五)年の日本の人口です。ここにおられる方の多くは、中学校、高等学校の社会科で、裾野をひいた富士山のような人口構成図を目にされていると思います。四十年前の日本はややそうでしたが、二〇〇五年ころには、六十五歳以上の人口が五人に一人(二〇・二%)となり、十五歳から六十四歳の生産年齢、ひらたくいえば働いて税金を払える人が、六六・二%、十四歳以下の幼児・児童の割合は一三・八%でした。そして、二〇五〇年からさらに五年あとの状況ですが、そのころ、

図1 概要

- (1) 2050年に予測されていること
- (2) 日本語社会が受ける影響
- (3) 日本語はどう変わる？
- (4) 今から心がけること

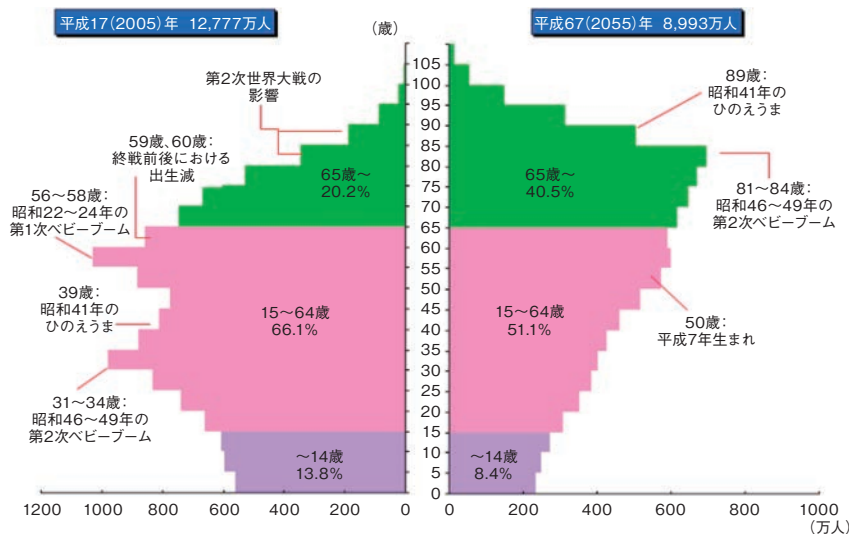


図2 日本の人口構成と未来像

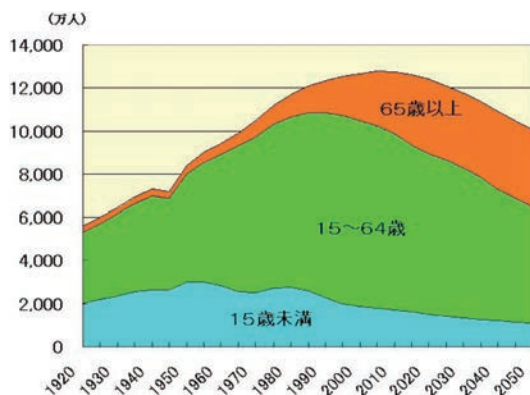


図3 日本の人口構成と未来像

人口の四〇・五%が六十五歳以上になります(図2)。これは年金をもらって働かない人たちです。その時代に十五歳から六十四歳の人口は五一・二%、十四歳以下はもっと減って八・四%となります。これを横にしてみると図3のようになります。この場合、最終点は二〇五〇年ですが、六十五歳以上の人の割合は二〇一〇年ころから変わりましたが、十五歳から六十四歳が大幅に減り、十五歳未満もどんどん減っていくことになります。

その社会的な影響は、図4のようになります。一番左のグラフが二〇〇〇年、真ん中は二〇二五年、そして二〇五〇年には右端のグラフのようになるでしょう。これは、生産年齢が年寄りを支えているという図です。これを比喩的にみていくと、今は三六人の働き手が、一人の高齢者を養っていますが、二〇二五年になると、一八人で一人

を養い、二〇五〇年になると一二人で一人の高齢者を養う時代になります。一人で一人を養う状態に近くなっていくわけです。この会場には、そこまで生産年齢ではない方、もうらう立場になっている方、そこまでは生きていない方などいろいろいらっしやると思います、その時に下で支えている人の重荷を考えると、



にしはら・すずこ

米国、インドネシア、オーストラリアで日本語教育実践をした後、国立国語研究所、東京女子大学勤務を経て、2012年4月より現職。2008年より2013年にかけて、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会において「生活者としての外国人に対する日本語教育」のカリキュラム案、教材例、能力評価、指導力評価などの検討に従事した。現在は、日本語を母語としない海外日本語教師を招聘して研修を行う機関に所属している。

主な著書は、『外国人の子どものための日本語 こどものにほんご 第1巻』(監修、ひょうご日本語教師連絡会議子どもの日本語研究会 著、兵庫県国際交流協会 協力、スリーエーネットワーク、2002年)、『外国人の子どものための日本語 こどものにほんご 第2巻』(監修、ひょうご日本語教師連絡会議子どもの日本語研究会 著、兵庫県国際交流協会 協力、スリーエーネットワーク、2002年)、『講座社会言語科学 第4巻 教育・学習』(西郡仁朗と共編著、ひつじ書房、2008年)、『言語と社会・教育シリーズ朝倉<言語の可能性>8』(編著、中島平三 監修、朝倉書店、2010年) ほか。

これは半端な所得税ではなかうと思われれます。二〇五〇年の日本の社会は、このようになると予想されているのです。

年齢別未婚率の推移

では、どうやって生産年齢人口を増やし、子どもを増やせばよいのでしょうか。

さきほどの図4から考えると、十五歳未満も、十五歳から六十四

歳も増えていけばよいわけですが、そのことに関してはあまり希望的なことは言えません。図5は、左上が二〇〇五年の男性の未婚率を示しています。二十五歳から二十九歳の男性未婚率が七割です。つまり、二十五歳から二十九歳の男性の十人のうち結婚している人は三人

だけということです。女性は、二十五歳から二十九歳の人のうち結婚している人が十人のうち四人ということになっています。結婚年齢が上れば上がるほど出産率は下がってきます。二〇五〇年までの子ども人口の動きは、図5の下の方のグラフのようになります。

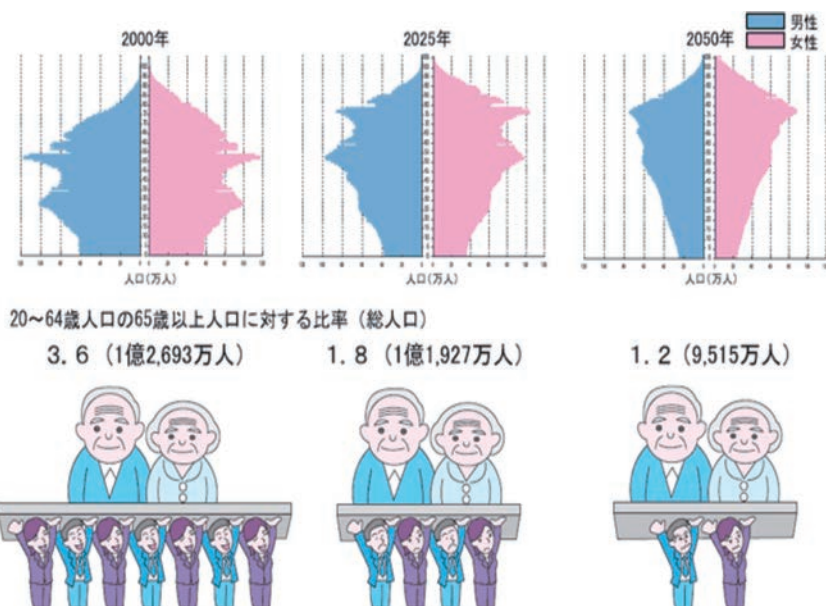
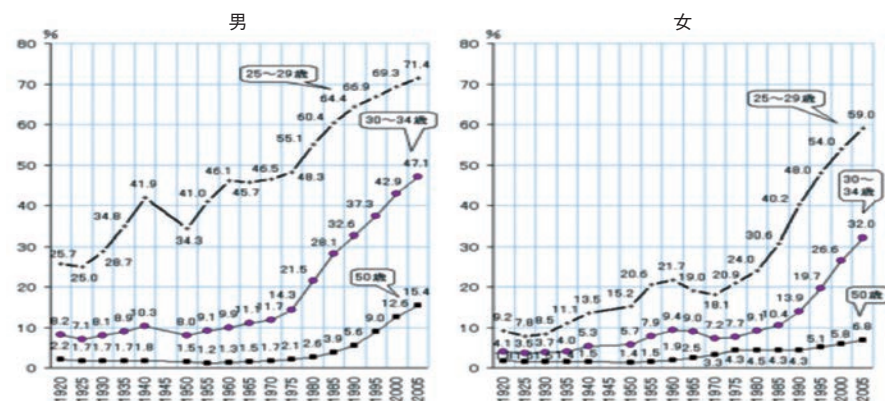


図4 20～64歳人口の65歳以上人口に対する比率



（注）50歳時の未婚率は「生涯未婚率」と呼ばれる。
（資料）国勢調査、人口統計資料集（社会保障・人口問題研究所）

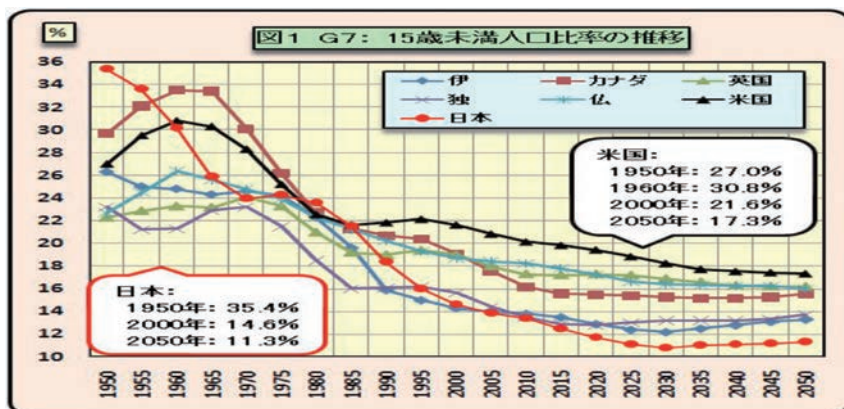


図5 年齢別未婚率と15歳未満人口比率の推移

イタリア、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、アメリカ、日本など、先進諸国といわれている国のなかで、日本が一番子どもの割合が低く、二〇五〇年には子どもは全人口の二・三％です。人口の十人に一人しか子どもがいらないことになります。これから何も対策を講じ

なかったら、二〇五〇年にはこうなるでしょうという予測です。

人口減少に対応した経済社会のあり方

そのことを危惧して、人口減少に対応した経済社会のあり方を、

経団連が二〇〇八年に提案しました(図6)。項

目別に見てみると、わが国の人口の展望という

項目には、総人口が減る、働き手が大幅に減少

し、地域偏在化が起こる、高齢化社会がますます

進むといったことが書いてあります。そして、

そのことが経済社会に及ぼす影響として、労働人

口が減っていく、年金の負担が増加し、経済社会

システムがとて厳しくなると書かれています。

それに対する対策として、中長期的な経済社

会の活力維持に向けた方策が提案されています。

第一は成長力の強化で、研究開発活動の促進や、

イノベーション人材の育成と招聘などが挙げられ

ています。第二には、未来世代の育成が挙げられ

ており、少子化対策、子育て支援、教育の再生

と続きます。少子化対策で重要なのは、出産率

の問題で、今日日本で一人の女性が生涯に生む子ど

もの数は、一・二と一・三のあいだを前後している

のですが、二以上でないと人口は増えていきませ

ん。今のままでは減るばかりだから、それをなん

とかしましょうということです。最後のポイント

は、経済システムの維持に必要な人材の活用・確



図6 人口減少に対応した経済社会のあり方【概要】

保ということです。どうしたら生産年齢人口を増やせるのか。そのために、女性の社会進出等の促進、国際的な人材確保競争と日本型移民政策の検討、そして受け入れた外国人の定着の推進が掲げられています。

日本語の行く末に関係する提案

この経団連の提案を日本語に特化して読んでみると次のようになります(図7)。まず、日本型移民政策の検討が提案されています。移民というと、工場で働く人、農漁村で働く人をイメージしますが、ここでいう日本型移民政策では、高度人材を積極的に受け入れていくこと、留学生その他、高度な資格を持つ人材を受け入れていくことが提案されています。つまり、社会の中核的な人材として働いて、税金を払ってくれる人を移民として受け入れましょうということです。そして、受け入れた人々が定着して日本の中核的な存在として自立し、市民としての誇りを持って、エンパワーメントして定着してくれるようにしましょうということです。その具体的対策の一つが、日本語教育の強化です。

日本型移民政策

- 高度人材の積極的受け入れ
- 留学生の受け入れ
- 資格を持つ人材の受け入れ

受け入れた人材の定着推進

- 地域・政府・企業の連携による社会統合政策
- 日本語教育強化
- 相当規模の受け入れ
- 国民のコンセンサス形成が急務

図7 日本語の行く末に関係する提案

その提案を実行に移して移民を受け入れた場合、日本語社会はどうすればよいのでしょうか(図8)。さきほど、鳥飼先生がグローバル社会で

は日本語も重要だすとお話をされましたが、二〇五〇年になって移民を受け入れて社会全体がいつそうグローバル化すると、日本語を母語としない人が増加し、言語少数派グループが増加します。中国語グループ、韓国語・朝鮮語グループ、ポルトガル語グループ、フィリピン語グループなどが増加していきます。

そこで考えなければならないことは、それぞれのグループ間の共通語としての日本語をどうするかという問題です。と同時に、少数派グループの方々が背景として持っている母語、つまりフィリピン語、中国語、韓国語、ポルトガル語、スペイン語等をどうするかという問題を含めて、国家の言語計画として、どのように日本国内の言語を政策的に管理するかが問題になってきます。

日本社会の言語はどう変わるか？

その場合、日本における言語使用の可能性はどうなるでしょうか(図9)。

可能性の一つは、中国語を母語とする人が多く住んでいる場所では中国語、ポルトガル語人口が多いところではポルトガル語というように、居住地域ごとに異なった言語が使われることです。可能性の二つめとして、複数の公用語を制定することによって国民全体で複数の言葉を使うということも考えられます。たとえば、カナダは二つの公用語を持っていますし、シンガポールやスイスなどは国内に居住する民族的に異なる背景の人たちへの配慮から複数の公用語を持っています。

可能性の三つめとして、日本語が公用語になるということがあります。それと同時に、社会を構成するグループ成員の出身国・地域の言

語使用が保証されるようになるのではないだろうか。

そういう時代が来たら、「共通語は当然、日本語だよ」と思っておられる方が非常に多いと思います。当然そうなるだろうという予測が立つということですが、そのことはどのような正当性を持つと言えるのでしょうか。今後の日本は、多様性に基づく社会の構築という観点に立ち、外国出身の民族的少数者が文化的アイデンティティを否定されることなく、対等な構成員として社会に参加し、豊かで活力ある社会の実現を目指すべきだという考え方があります(図10)。

その場合、英語はどうなっているのかという疑問を抱く方がおられるかもしれませんが、それは、国全体の言語政策のなかで考えられていくべき、もう一つのテーマだと思います。

社会統合政策と言語選択

今申し上げたように、可能性一・二・三が考えられますが、可能性一

- ・日本語非母語話者の増加
- ・言語少数派グループの増加
- ・共通語としての日本語の地位
- ・少数派グループの母語の保障
- ・言語計画・言語政策策定の必要性

図8 人口減少(移民受け入れ)が日本語社会に与える課題

- 可能性(1)** 居住地域ごとに異なった言語が使われる。
- 可能性(2)** 複数の公用語制定により全員が複数の言語を使う。
- 可能性(3)** 日本語が公用語となる。成員の出身国・地域の言語使用が保障される。

図9 日本社会の言語はどう変わる？

今後の日本は、多様性に基づく社会の構築という観点に立ち、外国出身の民族的少数者が文化的アイデンティティを否定されることなく、対等な構成員として社会に参加し、豊かで活力ある社会の実現を目指すべきである(山脇他, 2002)。

図10 可能性(3) 選択の基本となる考え方

- ・日本社会を海外からの人材に開放することを無計画に実行すると、複数の単言語社会が併存する可能性が生まれる(ダイグロシア状態)。
- ・社会共通の言語を設定することによって、情報収集・発信の機会を均等に保持し、社会に参画することを可能にする。
- ・日本に移動する人材が学歴・職歴にみあった社会的地位を確保して日本社会に参画するためには、日本語能力を持つことが重要である。
- ・そのためには、公的手段による日本事情と日本語のオリエンテーション計画が必要である。

図11 社会統合政策と言語選択

の、日本社会を海外からの人材に開放することを無計画に実行すると、複数の単言語社会が併存する可能性が生まれます(ダイグロシア状態)。そのことによって、世界各地で、言語戦争に端を発する戦闘状態が起こったりしています。そのため、社会共通の言語を設定することによって、情報収集・発信の機会を均等に保証し、社会に参画することを可能にすることが解決策として浮上してくるのではないのでしょうか。

そのとき、公的手段によって、日本社会と日本語のオリエンテーションを、入ってくる人々に対して保証する必要があるでしょう。そのことによって、日本に移動する人材が、学歴、職歴にみあった社会的地位を確保し、日本社会に参画する、そして日本語能力を持つことが可能になるのではないのでしょうか(図11)。

そして、言語権も問題ですが、日本語が公用語になって、日本の社会で法律用語やメディア、教育の用語が日本語になったとしても、そ

他の言語を母語とする人々の言語文化的背景が尊重されないのはおかしいです。そのためには、もともと日本語母語話者である人たちがそれらの言葉を学ぶということももちろんですし、私的な場での言語使用を公的に保証することも同時に考える必要があることだと思います(図12)。

日本語が公用語になった場合の課題

日本を公用語にして、日本語を共通語として日本国内では使いたくなくというところになった場合でも、今申し上げた言語的少数グループの言語権は当然保証されなければいけません。そして「正しい日本語」への暗黙の同化圧力を統括することが必要になるでしょう。絶対的に「正しい日本語」を唯一無二の規範として多様性を認めないということは公正ではないということです。具体的には、今の日本では方言の是認といったらいいかもしれません。世代差・性差などの「変種」への寛容性とも言えるでしょう(図13)。さらに、さきほど鳥飼先生がおっしゃったような意味でのやさしい日本語、通じる日本語、つまり、母語の違う人のあいだでも、公用語が互に通じるという条件を満たすことが必要になります。その場合、情報伝達優先の日本語と、美しい日本語、文学の日本語、芸術的日本語というようなものとの関係を再考せざるを得なくなるでしょう。

そのとき、公用語の絶対的条件として、まず情報伝達の機能が優先することを考えると、「以心伝心」とか「あうんの呼吸」というような、「言わなくても通じ合える」ことを最高の伝達と考えることに待ったがかかるだろうということです。

変わらざるを得なくなる？ 日本語の側面

日本語を外から見た場合、不透明だと思われるだろうと予測される点、つまり、国際共通語としての日本語が変わらざるを得なくなるだろうという点を、文の構造の面と運用の面でいくつか書き出してみました(図14)。

まず、命題を包み込む豊かなモダリティです。少し難しいのですが、たとえば、こういうことをいう若者がいたとします。「俺さあ、お前にほれちゃったみたいなんだよな」。これは直裁的に訳せば、「I love you」です。ですが、なんだかオブラートに包まれたというか、奥歯にものが挟まったというか、「ちゃったみたいなんだよな」というところが、曰く言い難くモダリティなのです。伝えたい情報の外にあって、それを情緒的に包み込む部分をモダリティというのですが、日本語はこれがとても豊かな言語だと言われています。だからこそ日本語は非常に温かい言語だと日本語母語話者同士は考えているのです。けれど外から見るとそこがちよっと理解しがたい部分になるのです。

そして、「電車がまいります」という例文。これは最近、文化審議会国語分科会が出した敬語の指針のなかで、謙譲語の二に入りますが、なんで電車が謙譲語になるのということ。謙譲語の一は、自分をへりくださせるということです。謙譲語の二はこの部分で、自分およびその周囲の事柄と思われることを、尊敬する誰かに話すときは自分側の事柄を下げることになるわけです。これも日本語のモダリティです。豊かな情緒的表現、論理式に書き換えられるような情報伝達の骨子の部分(命題)と同じように、豊かに存在する日本語の部

分ということです。

さきほど、「やり／もらい」の話を迫田先生がしてくださいました。たとえば、「論文の原稿は、〇〇先生が添削しました」というのは、文法的に間違っているわけでもなく、「正しい日本語」ではないとみんな思いますよね。先生だから「してくださいました」というのをつけたほうがいいということで、これは構造、つまり文法の領域ですが、人間関係がいやおうもなく組み込まれてしまっている部分になります。

次は、「オノマトペ」です。このごろ「がつつり食べよう」という若者が増えています。文化庁国語課のアンケートでは、二〇%から

- 公用語を決定することは、国内に存在する複数の言語を弾圧、あるいは抹殺することを意味しない。公用語法令化の結果、複数の言語母語話者グループのための政策的配慮が、総合的言語計画として必然的に伴わなければならない。

その一つが、「言語権」の保証である。言語権は、自言語の保持・公用語の習得の双方向に適用されるべき権利である。

国家の言語に対する権利

自分の言語に対する権利（カルヴェ，2000）

- 公用語の習得は、公的財源を使用し、公的機関によって運営されるべき制度として確立されなければならない。
- そして、付随する諸法規を含め、国の総合的実施計画として立案され、実行されるべきである。

図12 言語権への対応

- 言語少数派グループの言語権保証
- 「正しい日本語」への「暗黙の同化圧力」自制
- 少数派グループの各言語からの転移容認
- 変種への寛容性
- 「やさしい日本語」「通じる日本語」への転換
- 「情報伝達優先の日本語」と「美しい日本語」
- 通用しない「以心伝心」「あうんの呼吸」

図13 日本語が公用語になった場合の課題

文構造の側面

- 「命題」を包み込む豊かな「モダリティ」
「俺さあ、お前にほれちゃったみたいなんだよな」
「電車がまいります」
- 構造に組み込まれている人間関係
「論文の原稿は〇〇先生が添削してくださいました」
- 感性がそのまま語彙になる「オノマトペ」
「なんだかじめじめしてるんです」
「がつつり食べよう」
- 「する」よりも「なる」の文構成
「結婚することになりました」

図14 変わらざるを得なくなる？ 日本語の側面

二五%ほどの国民が使っています。「ガッツリ」、「ジメジメ」、「カラカラ」といった言葉は、感性がそのまま語彙になる表現なので、日本語の母語話者にはピタリと来るのですが、外からは理解しがたく、強いて翻訳しようとしても描写的な表現にならざるを得ないことになりました。

もう一つ、『する』と『なる』の言語学』という本がありますが、外から見ると、日本語の自動詞表現は、主体的であるはずの行動が、あたかも成り行きでそうなってしまうというニュアンスをもっているかのように解釈されてしまうことがあります。「結婚することになりました」って、いったい誰が結婚するわけ？。「主体的に決めたん

じゃなくて、そうなっちゃったわけ？」と思われてしまいますが、日本では「なりました」と言わないと、生意気に聞こえてしまいますよね。「結婚します」とか「結婚するんです」というのは、ちよつと奥ゆかしさを欠く、「おやおや」と思われてしまう言い方ですね。

コミュニケーション類型の側面

さきほど鳥飼先生もおっしゃったのですが、日本人は分かり合っていることは言わない、いう必要がないほうがよい関係だということが言われます。それから、おしゃべりとか、理屈っぽいのは敬遠されるという、「高文脈」なコミュニケーションパターンを持った言語です。言葉にしなくても伝わると考える部分が多いのを「高文脈」といいます。その反対はドイツ語です。「低文脈」といいます。言わないことは分かり合えない、はつきり口に出し合うほうがよい関係を生むということになります。日本語の場合、聞き手の役割として、常に推測によって話し手の発話意図を理解します。この人はどういうつもりで、こういうことを言っているんだろうか、言われないことにもたくさん意味があるのだと考えて、いつも緊張していなければならぬんです。そして、人間関係の構築においても、「わきまえ」、「気配り」が、日本社会ではとても大切です。直言居士は、理屈っぽいと同じように、あまり好かれないのではないのでしょうか(図15)。

それから、「自己開示」。自分についてなにを言うかということですが、図16にリストされているようなことです。自分は知っているが、他人は知らない部分を一番大切にするというか、そのことはあえて言わないというような文化です。それから、フラストレーションがたまっているとき、どのように反応をするかを調べた国際的な調査があ

り、日本語社会は「内罰的」だといわれることですが、「雨の日に歩道を歩いていたら、通りがかった車に泥をはねかけられてコートが汚れました。『すみません』と謝罪する運転手に、あなたは何と言いますか」という質問に対して「ぼんやり歩いていた私が悪いんです。気にしないでください」と答えるのがこのタイプになります。どうも日本人は、私が悪いんです、私にも落ち度があったのです、というようなことを言いたがるということです。

最後に、「起承転結」の話の展開です(図17)。さきほど鳥飼先生が大切なことを最後にいうとおっしゃいました。これが外から見るとどうも分かり難いといわれてしまう表現形式なのです。話の始まりからは言いたいことが見えてこないし、途中で「転」の部分)話が脱線するし、最後まで聞かないと結論が分からないと言われるのです。因果律ではなく、時系列にそって説明するということです。日本語では、理系の論文でもこういうものが多いらしく、だからノーベル賞がとれなくなるというようなことを心配する人もいます。

ではどうすればいいのか

他にも日本語コミュニケーションの特色は沢山あると思いますが、私たちは、外から見て分かり難い側面を抱えながら日本語をコミュニケーションの媒介語として生きているのだということに自ら気付くことが、これから多文化化していく社会では必要になると思います。自分を客観的に把握する能力をメタ認知能力といいます、それを心得ることです。こういうコミュニケーションパターンを持っているのだということを知ったうえで、言語文化的背景の違う人と接触するにはどうしたらよいのでしょうか。要するに伝わるための表現方法を開

発することだと思えます。本日司会をしてくださっている野田尚史先生は、ご著書『なぜ伝わらない、その日本語』で、伝えるための工夫の重要性を説いておられます。日本人同士も伝える努力が必要なのですが、言語的背景の異なる人々とのコミュニケーションで、何が伝わるのか、伝わり難いのかを知るのは一層大切です。そして、そのことと、美しい日本語とは矛盾しないということを認識するのも必要だと思います。さきほど「やさしい日本語」という表現ができましたが、この場合の「やさしい日本語」には、曖昧な解釈や、二つ以上の解釈があり得るような情報伝達のしかたを排除して、絶対誤解を招

かないようにするという意味もあると思えます。言葉には、そういった機能的な美しさと、詩の言葉のような芸術的な美しさなど、いろいろな美しさがあって、それぞれ大切にされなければならない文化遺産だと思のですが、言語的背景を異にする人が集まって共同で暮らす日本語社会、二〇五〇年を考えた場合、今から心がけてみることが必要ではないかと思うことを次に紹介します(図18)。

・おしゃべり・議論・討論は美徳だ。沈黙は金ではない。

・頭の体操のつもりで理屈っぽく語り合おう。

・伝えたいことは思い切って口にしてみよう。

- 高文脈 (vs. 低文脈) コミュニケーション
メッセージの全体に占める言語化の量
高文脈コミュニケーション：文脈依存率が高い (典型例は日本語)。
分かり合っていることは言わない。
言う必要がないほうがよい関係 (以心伝心)
「おしゃべり」「理屈っぽい」は敬遠される。
(低文脈コミュニケーション：文脈依存率が低い。典型例はドイツ語)
言わないことは分かり合わない。
はっきり口に出しあうほうがよい関係
聞き手 (読み手) は常に推測によって発話意図を理解する
- ポライトネス
人間関係に配慮したコミュニケーション・パターン
「わきまえ」「気配り」の日本語社会
「直言居士」は敬遠される

図15 コミュニケーション類型の側面

- 自己開示：自分について何を言うか、言わないか
公的自己 ←…………… 私的自己

自分も他人も知っている。	自分は知っているが 他人は知らない。
他人は知っているが 自分は知らない。	自分も他人も知らない。

- 外罰的 vs. 内罰的反応

雨の日に歩道を歩いていたら、通りかかった車に泥をはねかけられてコートが汚れました。「すみません」と謝罪する運転手に、あなたはなんと言いますか。

外罰的反応：「買ったばかりのコートなんです。弁償してください」

内罰的反応：「ぼんやり歩いていた私が悪いんです。気にしないでください」

無罰的反応：「これで、新しいコートを買う口実ができましたよ」

図16 コミュニケーション類型の側面 (2)

起承転結の表現類型

導入部分ではトピックが見えない。
「転」のところで論理が飛躍する。
重要なポイントは最後にならないと分らない。
時系列にそった説明 (因果律ではない)

図17 コミュニケーション類型の側面 (3)

- 自分の言葉に関するメタ認知能力を育てる。
- 言語文化的背景の違う人との接触のノウハウを知る。
- 伝わるための表現方法を開発する。
- 言葉には色々な美しさがあることを認識する。

おしゃべり・議論・討論は美德だ。

頭の体操のつもりで理屈っぽく語り合おう。

伝えたいことは思いきって口にしてみよう。

「ここは何も言わないでおこう」は禁句にしよう。

常に「冷えたアタマ」を維持するように心がけよう。

相手のコミュニケーション・スタイルを見抜いて対応しよう。

日本語の優れた使い手になろう。

図18 どうすればよいのか

・「ここは何も言わないでおく」というのでは、実は何も伝わらない。これは日本国内でも世代間のコミュニケーションの問題として語られています。したがって、「ここは何も言わないでおこう」は禁句にしよう。

・常に「冷えたアタマ」を維持するように心がけるようにする。論理式に還元できるような情報伝達ができるという余裕を自分の頭のなかにもっておこうということです。

・相手のコミュニケーション・スタイルを見抜いて対応しよう。相手がどのような言語的背景を持つ人なのかによって、自分のコミュニケーション・スタイルを柔軟に変えられるように努力してみよう。

そのような意味で、日本語の優れた使い手になろうということ提案して、私の話を終わりにしようと思います。(清聴ありがとうございました。)

参考文献

- ・カルヴェ・レイリジャン(西山教行訳) 2000 『言語政策とは何か』 白水社
- ・河野稠果 2007 『人口学への招待』 中公新書
- ・国立社会保障・人口問題研究所 2007 『日本の将来推計人口』 厚生統計協会
- ・日本経済団体連合会 2008 「人口減少に対応した経済社会のあり方」
- ・野田尚史 2005 『なぜ伝わらない、その日本語』 岩波書店
- ・松谷明彦・藤正巖 2002 『人口減少社会の設計』 中公新書
- ・山脇啓造・柏崎千佳子・近藤敦 2002 「社会統合政策の構築に向けて」 明治大学社会科学研究所デイスカッションペーパーシリーズNo.1-2002-1
- ・Carroll, T. 2001 Language Planning and Language Change in Japan. Curzon
- ・Daoust, D. 1997 Language planning and language reform. In F. Coulmas (ed.) The Handbook of Sociolinguistics. Blackwell. 436-452
- ・Spolsky, B. & Shohamy, E. 2000 language practice, language ideology, and language policy. In Lambert & Shohamy (eds.) Language Policy and Pedagogy. John Benjamins 1-41